

パムツドブルンを読む

——タジャワン族の狩猟詩歌——

本稿の目的は、タジャワン (Tadyawan) 族の狩猟シーズンに歌われるパムツドブルン (pamudburun) という詩歌について報告することである。テキストとして引用した例歌を読み、その伝える「意味」について考察し、タジャワン族の世界観にふれてみたいと思う。

一、タジャワン族の概要

タジャワン族は、フィリピン共和国のミンドロ島中央東部の山岳地帯に住む焼畑農耕民である。その人口は、約一五〇〇〇～二〇〇〇人と推測される。

その居住地域の気候は、九月中旬から二月上旬まで続く雨季、二月中旬から五月下旬までの乾季、そして六月から九月上旬までの乾季から雨季への移行期に区分される。

史苑 (第五〇巻第二号)

小幡 壮

タジャワン族の一年は、その季節に応じて乾季 (移行期を含めて) の農耕活動と雨季の狩猟活動から成立っている。

乾季の生業活動は、焼畑における農作業に集中する。それまで連日降り続けていた雨が、二月中旬を境にして、まったく降らなくなる。雨季から乾季へと季節は劇的に変化する。乾季を待ちわびていた人々は、雨季の終りごろにあらかじめ選定しておいた焼畑開墾予定地の森へ出かけて、焼畑づくりにとりかかる。四月下旬までには、一連の焼畑開墾作業 (伐採・火入れ・燃え残りの木々の除去) が完了する。五月中旬までには主要な農作物 (陸稲・サツマイモ・ヤムイモ・トウモロコシなど) が播種、あるいは植え付けられる。六月から七月ころにかけて陸稲畑の除草が行なわれる。八月にはサツマイモが収穫可能となり、次いで九月には陸稲が収穫される。

陸稲の収穫が終了するころになると雨季に入る。九月から十月にかけては台風シーズンでもある。十一月から一月にかけては、ほとんど毎日雨が降り続く。本格的な雨が続くこの三ヶ月間はシブ(sibu)とよばれ、焼畑の開墾(森林の木々の伐採)が禁じられている。

そして、このシブの期間がタジャワン族の狩猟シーズンなのである。各々の家で狩猟者(多くの場合はその家の年長の男)が狩猟開始を告げる儀礼を執行したのち、数人が協同し合つて森で罾づくりを開始する。狩猟の対象となる動物は、ネズミや鳥類などの小型動物、イノシシ・ヤマネコ・ヘビ・サルなどの中型動物である。野生水牛や鹿などの大型動物も以前はよく捕獲されたが、最近では数が減少して、ほとんど捕獲できない。狩猟シーズンはそのシーズン開始を告げる儀礼と終了を告げる儀礼によって、焼畑農耕シーズンと明確に区別されている。この狩猟シーズンの夜間に歌われる狩猟詩歌が、本稿で紹介するバムッドブルンである。

二、タジャワン族の伝承詩歌

タジャワン族の口頭伝承(歌・物語り・詩など)は日常生活と密接に関連している。平穩に過ぎていくように見え

る靈歌は明け方まで延々と歌い続けられる。一年のうちのある限られた季節にのみ歌われる非日常的な歌の代表例は、バムッドブルンである。バムッドブルンは、雨季のあいだの狩猟シーズンにのみ歌われる非日常歌である。バムッドブルンについては、以下で詳しく述べることにする。

タジャワン族は文字を持っていない。したがって、すべての伝承詩歌が口承によって語り、あるいは歌い継がれてきた。ここでタジャワン族の口頭伝承全般について述べる余裕はない。ただ、その口頭伝承を研究することによって、タジャワン文化の全体像がより明確になってくるという成果に注目する必要がある。

では次に、口頭伝承のなかで狩猟と関連し、多くの「意味」を伝えてくれるバムッドブルンについて述べてみよう。

三、バムッドブルンについて

前述したように、狩猟シーズンの夜間にのみバムッドブルンは語られたり、歌われたりする。バムッドブルンには語り形式のものと歌い形式の二つのタイプがある。バムッドブルンの語幹である△budud△という単語そのものの意味は「くり返す」である。それは、バムッドブルンで歌い語られる節が何度も「くり返さ」れるということと、父

る日々の喜怒哀楽を表現するために、人々はいろいろな歌を歌う。愛する我が子のために子守り歌を歌う。いとしい人へ思いを歌に托して伝える。一日の労働を終え、その疲労を癒すために歌を歌う。夜、家族が寝静まってから、家の周囲を徘徊する悪霊から家族を守るために靈歌を歌う。

人々は男女の別を問わず、実に多くの歌を知っている。それらは祖父母や父母から歌い継がれてきたものがほとんどである。人々は、その時の自分の気持ちや周囲の状況に合った歌をレパートリーのなかから選択して歌う。

タジャワン族の歌は大別して二種類に分類できる。ひとつは、時の制限なしにいつでも歌うことができる一般的な日常歌であり、もうひとつは、時に規制される非日常的な歌である。この非日常的な歌は、夜間のみ、または一年のある限られた季節のあいだのみ歌うことが許される。夜のあいだだけ歌われる歌の代表的なものは、バラウナン(barunan)とよばれる靈歌である。夜、人々が寝静まると、村中のあちこちの家々からこのバラウナンの歌声が聞えてくる。人々は、この靈歌を歌いながら自己の精霊を目に見えないむこう側の世界から呼び寄せるのだという。むこう側の世界へ自らが赴く技術を知らない一般の人々は、この靈歌を歌うことによって自己の精霊をむこう側の世界から呼び寄せ、心配ごとや問題の解決を計ろうとする。こ

から子へ世代から世代へと「くり返し」語り継がれるこの歌の性格を示している。この歌のなかで、歌い語られる内容は複雑多岐にわたる。狩猟に関係した内容の歌がもちろん多いが、すべての歌がそうであると言うわけではない。平均的なタジャワン族の成人は、だいたい五つ以上のバムッドブルンを知っているようだ。約三十分ぐらいで終了する短いものから、五晩にわたって歌い続けられるような長いものまである。

バムッドブルンを研究することは、実に骨の折れる作業である、ということを告白しなければならない。その第一の理由は、インフォーマントが自分の知っているバムッドブルンを披露することを嫌がるためである。それは、バムッドブルンが歌い手である狩猟者の靈的力(あるいは獲物を捕獲する力)を昂揚させたり、狩猟者の所有する精霊(あるいは靈的世界に存在するもう一人の狩猟者自身である獲物の所有者)との交信を促進させるために歌われるからである。したがって、もしバムッドブルンを他人に教えると、本来自分が持っていた靈的力が他人に移ってしまい、自分の力は失なわれ、その結果、獲物がとれなくなってしまう。そのような理由から、多くのインフォーマントがバムッドブルンを教えることを拒否した。

第二の理由は、バムッドブルンのなかで歌い語られる単

語の多くが、タジャワン語の日常会話で話される言葉とは異なる独特のものである、ということである。したがって、タジャワン族の青年でも、ときどき理解できないパムッドブルンに出会することがある。単語そのものの難解さと同時に、歌詞の表現上の難しさもある。省略形や倒置形が頻繁に用いられ、タジャワン文化によほど詳しい老人でないと理解できないような比喻表現が盛り込まれている。インフォーマント自身が説明に苦しむということがしばしば起きる。

第三の理由は、フィールド・ワーカー自身の問題でもある。パムッドブルンを理解するためには、いくつかの言語の壁を経なければならぬ。パムッドブルン用語↓タジャワン語↓タガログ語といういくつかの言語を経て理解するに到る、ということがよくある。言語の壁が多ければ多いほど、本当のパムッドブルンの意味が曲解されていく危険性がある。インフォーマントとフィールド・ワーカーの両者にとって母語でない言語(タガログ語)を介さなければならぬ時が問題なのである。

以上述べたように、パムッドブルンを研究するには多くの困難が伴う。それでも、そこから得られるものは、けっして少なくない。というのは、タジャワン族の狩猟や獲物に対する考え方、霊的存在との係わり方、こちら側の世界

とむこう側の世界の相互関係、全体的な宇宙観、そしてタジャワン族の諸儀礼に関連する世界観などをパムッドブルンを通して垣間見ることができるところである。それでは、まず以下のテキストを例にあげながら、タジャワン文化の一端にふれてみよう。

四、例歌(テキスト)

- 1 ダナワンがいった
- 2 バリンガシンよ さがしに行こう
- 3 母なる海のむこうがわへ
- 4 舟を出した
- 5 一漕ぎすると二漕ぎ分すすんだ
- 6 二漕ぎで四漕ぎ分すすみ
- 7 三漕ぎで六漕ぎ分
- 8 四漕ぎで八漕ぎ分すすんで
- 9 母なる海のむこうがわについた
- 10 人があるかなくなった道をたどって
- 11 ふたりはさがした
- 12 蜂の巣をみつけた
- 13 マリユムの木に 蜂の巣を
- 14 ダナワンがいった

- 15 バリンガシンよ もう、夕方になってしまったな
- 16 母なる海のむこうがわから
- 17 舟を出した
- 18 一漕ぎすると二漕ぎ分すすんだ
- 19 二漕ぎすると四漕ぎ分すすみ
- 20 三漕ぎすると六漕ぎ分
- 21 四漕ぎで八漕ぎ分すすんで
- 22 また母なる海のこちらがわについた
- 23 家にもどった
- 24 ダナワンがいった
- 25 バリンガシンよ 米をつけ
- 26 たったの一度だけつくと
- 27 箕をとった
- 28 ダナワンはごはんをたいた
- 29 かれの器は
- 30 ちいさな卵の殻
- 31 バリンガシンの器は
- 32 おおきな土鍋
- 33 かれら(バリンガシン夫婦)だけの
- 34 おながが丸太のようにふくれた
- 35 翌日

- 36 ダナワンはいった
- 37 バリンガシンよ また、さがしに行こう
- 38 母なる海のむこうがわへ
- 39 舟を出した
- 40 一漕ぎすると二漕ぎ分すすんだ
- 41 二漕ぎで四漕ぎ分すすみ
- 42 三漕ぎで六漕ぎ分
- 43 四漕ぎで八漕ぎ分すすんで
- 44 母なる海のむこうがわについた
- 45 ダナワンはいった
- 46 バリンガシンよ さあ、さがそう
- 47 また、人があるかなくなった道を探るいた
- 48 蜂の巣をみつけた
- 49 マリユムの木に 蜂の巣を
- 50 その蜂の巣をとると
- 51 木がピンとはねかえった
- 52 ダナワンはいった
- 53 バリンガシンよ もう、夕方になってしまったな
- 54 母なる海のむこうがわから
- 55 また、舟を出した
- 56 一漕ぎすると二漕ぎ分すすんだ
- 57 二漕ぎで四漕ぎ分すすみ

58 三漕ぎで六漕ぎ分
59 四漕ぎで八漕ぎ分すんで
60 また、母なる海のこちらがわについた
61 家にもどって
62 梁につるした
63 桁につるした
64 その蜂の巣を
65 ダナワンはいった
66 バリンガシンよ もう、くらくらってきたな
67 米をつけ
68 たったの一度だけつくと
69 箕をとった
70 ダナワンの器は
71 ちいさな卵の殻
72 バリンガシンの器は
73 おおきな土鍋
74 煮たつと家がぐらぐらゆれた
75 かれら(バリンガシン夫婦)だけの
76 おなが丸太のようにふくれた
77 翌日
78 ダナワンはいった

79 バリンガシンよ おまえはここにいろ
80 おれは水浴びにいく
81 母なる海のこちらへ
82 舟を出した
83 一漕ぎすると二漕ぎ分すんだ
84 二漕ぎで四漕ぎ分すみ
85 三漕ぎで六漕ぎ分
86 四漕ぎで八漕ぎ分すんで
87 母なる海のこちらがわについた
88 バリンガシンはいった
89 もう夜だ ダナワンはどこへいったんだ
90 まだ、家にかえってこない
91 ダナワンの父親はシャムブリラワンにいった
92 わしのダナワンはどこへ行ってしまったんだ
93 おまえも水汲み場へ(行ってさがしてこい)
94 竹筒をカラシカランとぶつけて
95 シャムブリラワンはむこうの水汲み場へいった
96 どうしても竹筒は水でいっぱいにならない
97 シャムブリラワンはおもった
98 あら、どうしてわたしの竹筒は水でいっぱいにならないのかしら

99 たぶん、ダナワンがのんでいるからだわ、と
100 家にもどって
101 シャムブリラワンはいった
102 どうしても竹筒は水でいっぱいにならない
103 たぶん、ダナワンがのんだのだろう、と
104 義父はたずねた
105 ダナワンをみたかどうか、と
106 シャムブリラワンはこたえた
107 みなかった、と
108 かわいそうなダナワンよ
109 と、父親はいつて
100 オイオイないた

119 家にもどって
120 クンクヌガンはいった
121 どうしても竹筒は水でいっぱいにならない
122 たぶん、ダナワンがのんだのだろう、と
123 義父はたずねた
124 ダナワンをみたかどうか、と
125 クンクヌガンはこたえた
126 みなかった、と
127 かわいそうなダナワンよ
128 と、父親はいつて
129 オイオイないた

111 翌日
112 竹筒をカラシカランとぶつけて
113 クンクヌガンがむこうの水汲み場へいった
114 水をくむ
115 竹筒は水でいっぱいにならない
116 クンクヌガンはおもった
117 あら、どうして わたしの竹筒は水でいっぱいにならないのかしら
118 たぶん、ダナワンがのんでいるからだわ、と

130 父親は竹槍を仕掛けた
131 敷居のうえに
132 父親はとなえた
133 ダナワンのほかはかかるなよ、と
134 夕方になった
135 なにもかかっていない
136 ダナワンは やはりかえってこなかった
137 ダナワンのことをおおいに心配して
138 両親はオイオイないた
139 かわいそうなダナワンよ

たぶん、母なる海のむこうがわへ行ってしまったのだ
ろう

と、両親はいつて

そのままねてしまった

いつまでたっても目をさまざなかった

ダナワンはふたたび姿をあらわした
ダナワンはバリンガシンにいった
おれたちだけになってしまったな
家を移そう

ダナワンはバンバンという名の幼木をきりとった
まんなかにたてると

大家屋ができあがった

床もできあがった

広い散歩場

こどものようにちいさく見える

カンカンと音をたてて木をきっている

一日中 バリンガシンは

柱がたりない たったの二本

ダナワンはいった

バリンガシンよ なにをそんなに手間どっているんだ
家をたてるのに

バリンガシンはいった
おれたちのやり方はこうだろうに

ダナワンはいった

バリンガシンよ こうすればいいんだ

バンバンの幼木をきりとって

まんなかにたてると

大家屋ができあがった

床もできあがった

広い散歩場

こどものようにちいさく見える

翌日

ダナワンのところに義父がやってきた

義父へのかれの贈り物は

尾ヒレがまだピクピクうごいているたぐさんのプリガ
ンという魚

バリンガシンのところにも義父がやってきた

義父へのかれの贈り物は

たぐさんのヤムイモ

翌日

ダナワンはいった

バリンガシンよ 稲かりをしよう
むこうの畑で

ダナワンが一本の稲の穂先をかりとると

千の家が(稲穂で)いっぱいになった

シャムブリラワンが一本の稲の穂先をかりとると

千の家がいっぱいになった

ダナワンはいった

おれは待つ バリンガシンを待つ

どうして、あいつの籠はいっぱいにならないんだ

ダナワンはバリンガシンにいった

稲のかり方はそうじゃあないんだ

こうするんだ

ダナワンが一本の稲の穂先をかりとると

千の家がいっぱいになった

シャムブリラワンはいった

わたしはクンクヌガンを待つわ

どうして、あんたの籠はいっぱいにならないの

稲のかり方はそうじゃあないの

シャムブリラワンが一本の稲の穂先をかりとると

千の家がいっぱいになった

ダナワンはいった

バリンガシンよ もう、くらくなってきたな

米をつけ

バリンガシンはなん度もなん度もついている

米はつけない

ダナワンはいった

米のつき方はそうじゃあないんだ

こうするんだ

ダナワンがたったのいちどだけボンとつくと

箕をとった

ダナワンは米をたいた

かれの器は

ちいさな卵の殻

バリンガシンの器は

おおきな土鍋

かれら(バリンガシン夫婦)だけの

おながが丸太のようにふくれた

こどもが越えることができないほど

翌日

ダナワンはいった

バリンガシンよ もう陽が出たぞ

さあ、また稲かりをしよう

ダナワンが一本の稲の穂先をかりとると

222 千の家がいったいになった
223 シャムブリラワンが一本の稲の穂先をかりとると
224 千の家がいったいになった
225 バリンガシンが一本の稲の穂先をかりとると
226 千の家がいったいになった
227 クンクヌガンが一本の稲の穂先をかりとると
228 千の家がいったいになった
229 ダナワンがいった
230 バリンガシンよ もう、くらくなってきたな
231 家にかえった
232 バリンガシンは米をついた
233 たったのいちどだけボンとつくと
234 箕をとった
235 ダナワンの器は
236 ちいさな卵の殻
237 バリンガシンの器は
238 おおきな土鍋
239 かれら(バリンガシン夫婦)だけが
240 食べに食べて
241 おなかが丸太のようにふくれた
242 こどもが越えることができないほど

243 翌日
244 ダナワンはいった
245 バリンガシンよもう陽が出たぞ
246 畑についた
247 ダナワンが一本の稲の穂先をかりとると
248 千の家がいったいになった
249 シャムブリラワンが一本の稲の穂先をかりとると
250 千の家がいったいになった
251 バリンガシンが一本の稲の穂先をかりとると
252 千の家がいったいになった
253 クンクヌガンが一本の稲の穂先をかりとると
254 千の家がいったいになった
255 ふもとの方から
256 てっぺんまで
257 かりとってきたところをふり返ってみる
258 てっぺんから
259 ふもとの方まで
260 てっぺんの方を見あげる
261 減らない
262 ダナワンはいった
263 あれ 終らないな
264 おじたちを呼んでこよう

265 ダナワンはおじたちのところへ行った
266 ダナワンはおじたちにたずねた
267 もし稲かりをしてくれるなら
268 いっしょにやろう、と
269 おじたちはダナワンの家にやってきた
270 バリンガシンは米をついた
271 たったのいちどだけボンとつくと
272 箕をとった
273 ダナワンの器は
274 ちいさな卵の殻
275 バリンガシンの器は
276 おおきな土鍋
277 おなかが丸太のようにふくれた
278 こどもが越えることができないほど
279 バリンガシンはおじたちにごちそうをした
280 箕いっぱい盛ったごはんを
281 おじたちのおなかはいっぱいにならなかった
282 ダナワンもごちそうした
283 たった二粒の米を
284 おじたちは食べに食べた
285 一粒一粒 たいらげることができない
286 おなかがいっぱいになってしまった

287 翌日
288 ダナワンはいった
289 バリンガシンよ もう、陽が出たぞ
290 おじたちを畑につれていった
291 ふもとの方から稲をかる
292 てっぺんまで
293 かりとってきたところをふり返ってみる
294 まだ、いっぱいある 減らない
295 てっぺんから
296 ふもとの方まで
297 てっぺんの方を見あげる
298 やっぱり減らない
299 シャムブリラワンはおじたちにいった
300 ダナワンの家はあのすき間の狭い家ですよ、と
301 ダナワンはいった
302 バリンガシンよ もう、くらくなってきたな
303 米をつけ
304 たったのいちどだけボンとつくと
305 箕をとった
306 ダナワンの器は
307 ちいさな卵の殻
308 バリンガシンの器は

309 おおきな土鍋
310 おなかは丸太のようにふくれた
311 こともが越えることができないほど

翌日

312 シャムブリラワンはいった
313 わたしは水浴びに行く、と
314 夕方になった

315 ダナワンはいった
316 ずいぶんおそいな

317 ダナワンは水汲み場へ行ってみた
318 シャムブリラワンはいなかった

319 捜しに捜した
320 見つからない

321 いったいどこへ行ってしまったんだらう
322 地下の五つの世界へ行ってさがした

323 天上の五つの世界へも
324 シャムブリラワンは見つからなかった

翌日

325 ダナワンはいった
326 おれはもういちど

327 シャムブリラワンをさがしに行く
328

五、テキストの説明と解説

登場人物はダナワン(兄)、バリンガシン(弟)、シャムブリラワン(ダナワンの妻)、クンクヌガン(バリンガシンの妻)、ダナワン兄弟の両親、義父、そしておじ達などである。それでは、まずストーリーを順に追って、テキストの内容について説明していこう。

ダナワン兄弟は、海のむこう側にある島へ蜂蜜をとりに出かける。こちら側の島とむこう側の島の間に存在する海を舟で渡る。一漕ぎしかしないのに舟は二漕ぎ分進む。そして、四漕ぎすると八漕ぎ分進んで舟はむこう側の島に着く。兄弟は人が歩かなくなった道を歩いて蜂蜜を探す。マリユムという木に蜂の巣を見つけたが、夕方になってしまったので、その日はとらずに帰ることにする。来た時と同じように舟を漕いで帰って来る。家にもどって、ダナワンがバリンガシンに米を脱穀するようにと言う。たったの一度だけポンと臼を突くと米は脱穀される。箕を用いて穀殻を選り分ける。その精米をダナワンは小さな卵の殻で煮る。バリンガシンは大きな土製の釜で煮る。たくさん食べたバリンガシン夫婦のお腹だけが丸太のようにふくれる(1~34行目)。

329 もうかえてこない

330 おまえたち夫婦だけ(で暮せ)

331 と、バリンガシンはいった

332 おれたちをおいて行かないでくれ

333 ダナワンは行ってしまった

334 水汲み場の道をさがしまわった

335 絶壁の底までも

336 見つからない

337 いったいどこへ行ってしまったんだらう

338 たぶん、光の道があるいて行つたのだらう

339 天上の五つ目の世界へ

340 ダナワンも光の道があるいて

341 上へいった

342 夫婦はまた出会った

343 夕方になった

344 ダナワンは帰ってこない

345 バリンガシンは妻にいった

346 ダナワンはもう帰ってこない

347 さっきダナワンがそういった

348 おれたち夫婦だけになってしまった

349 樹皮布をとりだして

350 そのまま夫婦はねてしまった

翌日、兄弟はまた蜂蜜をとりに出かける。前日と同様の方法でむこう側の島へ渡り、蜂蜜を探す。やはりマリユムという木に蜂の巣を見つけた。それを木からとると、それまで蜂の巣の重さでしなっていた木がピンとはね返る。夕方になり、むこう側の島から舟を出して、また同じように舟を漕いで帰る。家にもどって、とって来た蜂の巣を家の梁や桁につるす。前日と同じように米を搗き、煮る。バリンガシン夫婦の大釜がぐつぐつ煮たつと、家までぐらぐら揺れる。やはり、ごはんの量が対照的(35~76行目)。

翌日、ダナワン一人が海のむこう側へ水浴びに行く。ところが、夜になっても帰って来ない。父親はダナワンの妻であるシャムブリラワンに水汲み場へ行って捜してくるようになり、と言う。彼女は水を入れる竹筒を背中にかつぎカランカラと音をたてながら、水汲み場へ行く。水筒はどういう訳か水でいっぱいにならない。彼女は、ダナワンが飲んでいいるからだろう、と考える。家にもどって、そのことを義父に伝える。義父は、ダナワンの姿を見たかどうかと尋ねる。彼女は、見なかった、と答える。それを聞いて父親は、かわいそうなダナワンよ、と言ってオイオイ泣く(77~110行目)。

翌日、今度は(バリンガシンの妻である)クンクヌガンが水汲み場へ捜しに行く。やはり、どうしても水筒はいっ

ばいにならない。多分、ダナワンが飲んでいるからだろう、と彼女は考える。家にもどり、そのことを義父に伝える。ダナワンを見たかどうか、と義父は尋ねる。見なかった、と彼女は答える。それを聞いたダナワンの両親は大声で泣く。それから、父親は姿をくらましたダナワンを捕まえるために、数居の上に竹槍の尻を仕掛ける。ダナワン以外はかからないように、と唱える。夕方になっても何もかからなかった。結局、ダナワンは帰って来なかった。両親はダナワンのことを心配して泣き続ける。海のむこう側の島へ行ってしまったのだろう、と考える。泣き疲れた両親は、そのまま寝てしまう。そして、いつまでたっても目を覚まさない(111~143行目)。

ダナワンは再び姿を現わす。しかし、両親はもういない。家に移しかえることにする。ダナワンがバンバンという幼木を一本切り取って、それを立てると、あつと言う間に大屋が完成する。広い散歩場のような床。反対側の壁に立った大人が、まるで子どものように小さく見えるほど大きな家。一方、バリンガシンは夕方まで一生懸命木を切り倒している。それでも、まだたつた二本しか切り倒していない。家を建てるのにどうしてそんなに手間どっているんだ、とダナワンが尋ねる。俺たちはずっとこのようにして家を建ててきたじゃあないか、とバリンガシンは答える。

翌日、また稲刈りに出かける。今度は四人がそれぞれ一本の稲の穂先を刈り取ると、それぞれ千の米倉が稲穂でいっぱいになる。夕方になり家にもどる。バリンガシンが一度だけボンと搗くと、今度は脱穀される。小さな卵の殻と大きな釜で、またそれぞれ米を炊く(217~242行目)。

翌日、また稲刈りをする。四人がそれぞれ一本の稲穂を刈り取ると、それぞれ千の米倉が稲穂でいっぱいになる。しかし、陸稲畑の下から上まで刈り取り、下の方を見おろすと、たつた今刈り取ったはずなのに、たくさん刈り残しがある。それではと、また上から下まで同じところを刈り取る。下まで刈り取って、上の方を見あげる。やはりまだたくさん刈り残しがある。刈っても刈っても稲穂はちっとも減らない。そこでダナワンは、おじ達に稲刈りを手伝ってもらうことを思いつく。彼はおじ達のところへ行って、

稲刈りの手伝いを依頼する。おじ達は手伝うためにダナワンの家へやって来る。バリンガシンは大釜で多量のごはんを炊いて、箕に山盛りにしておじ達にごちそうをする。ところが、おじ達はそれをベロリと一瞬のうちにたいらげて

ダナワンは自分の家を建てた時と同じようにして、バリンガシンのために大屋を完成させる(144~169行目)。

翌日、ダナワンのところに新しく完成した家を見に、義父がやって来る。義父へのダナワンの贈り物は、まだ生きているブリガンという魚。バリンガシンのところへも義父がやってくる。義父への彼の贈り物はヤムイモ(170~176行目)。

翌日、ダナワンは陸稲畑で稲刈りをしよう、と言う。ダナワンがたつた一本の稲の穂先を刈り取ると、あつと言う間に千の米倉が稲穂でいっぱいになってしまう。シャムブリラワンも一本の稲穂を刈り取ると、千の米倉が稲穂でいっぱいになる。ダナワンはバリンガシンを待っているが、彼の籠はまだいっぱいになっていない。稲の刈り方はそうじゃあないんだ、と言ってダナワンが刈り方を教える。見本に一本の稲穂を刈り取って見せると、千の米倉が稲穂でいっぱいになる。シャムブリラワンはクンクヌガンを待っている。彼女の籠もまだいっぱいになっていない。シャムブリラワンが刈り方を教え、見本を示すと千の米倉が稲穂でいっぱいになる。暗くなり、家へもどる。ダナワンはバリンガシンに米を搗け、と言う。一生懸命に米を搗くが、なかなか搗けない。ダナワンが米の搗き方はそうじゃあないんだと言って、たつたの一度だけボンと臼を突いて見せ

しまう。そのうえ、ちっとも満腹にならない。そこでダナワンは、たつたの二粒の米をごちそうする。おじ達はその二粒の米を食べても食べても食べ尽すことができず、ついにお腹が一杯になってしまう(243~286行目)。

翌日、おじ達もいっしょに稲刈りをする。陸稲畑の下から上まで刈り取る。刈り取ったはずのところを見おろすと、たくさん刈り残しがある。やはり、陸稲畑の稲穂は刈っても刈っても、ちっとも減らない。シャムブリラワンはおじ達に、ダナワンの家(米倉)はあのすき間の狭い家ですよ、と教える。夕方になり家にもどり、米を搗きいつもと同じようにごはんを炊いて食べる(287~311行目)。

翌日、シャムブリラワンは水浴びに行く、と言って家を出たまま、家にもどらない。ダナワンは水汲み場へ行って捜すが、見つからない。地下にある五つの世界と天上にある五つの世界へも行つて一生懸命捜すが、見つからない(312~325行目)。

翌日、ダナワンはまたシャムブリラワンを捜しに出かける。俺はもうもどつて来ないだろうから、お前達二人夫婦だけで暮せ、とダナワンはバリンガシンに言って去る。俺たちをおいて行かないでくれ、とバリンガシンはダナワンに哀願する。しかし、ダナワンは行ってしまう。また、水汲み場の周囲を捜してみる。見つからない。たぶん、朝日

の差した太陽の光線の道のうえを歩いて、天上の五つ目の世界へ行ってしまったのだろう、と考え、ダナワンも同じように太陽の光線の道を歩いて、天上の五つ目の世界へ行く。そこでダナワン夫婦は再び出会う。夜になってしまふやはり、ダナワンは帰って来ない。もう、もどって来ない、と言って出て行った。俺たち夫婦二人だけになってしまった、とバリガンシンは妻に言う。夫婦は恐ろしくなつて、樹皮布を頭からすっぽりかぶつて寝てしまふ(326~350行目)。

例歌としてあげたこのパムッドブルンを理解するためには、いくつかの解説が必要となるだろう。重要と思われる点をいくつかあげて順々に説明していく。

一、タジャワン族の夢

タジャワン族の人々は、夜間に見る夢に特別な意味を与えている。かれらにとって、夢はカジョ(Kadjo)の行動である。カジョとは、目に見えないもう一人の自分自身(靈魂)である。本人と同じ姿をしていて、昼間は本人のそばを離れず、いつもびたりとくっついていて、夜になると、熟睡している本人の身体を離れ、一人歩きをする。その行動が寝ている本人の夢となって知覚される。かれらは、その日に起きることを前の晩に見た夢から予知する。たとえば、前の晩に異に獲物がかかった夢を見た場合、夢で見た

とうりの道を通つてその罨のところへ行くと、必ず獲物がかかっているという。つまり、テキストの第一日目の部分(1~34行目)は、夢で見たことの内容を、そして第二日目の部分(35~76行目)は、夢で見たとうりにむこう側の島へ舟を漕いで渡り、同じ道を歩いて蜂の巣を見つけて取つた、という実際の行動の内容を歌っている、と考えることができる。

二、中間に存在する海

タジャワン族の人々のなかには、海のむこう側に自分たちが住んでいる島と同一の島があり、その中間に海が境界として存在している、と考えている人がいる。テキストの前半部でダナワン兄弟は、こちら側の島とむこう側の島を何度か往来する。それは、タジャワン族の神話物語りのなかで語られているように、神話時代にはこの世とあの世の往来が可能だった、ということと一致している。たしかにダナワン兄弟は、こちら側の島とむこう側の島を往つたり来たりすることが可能だった。ところが、ダナワン一人が海のむこう側の島へ水浴びに行つたままもどって来なくなると、こちら側の島からむこう側の島へ行くことが不可能となり、こちら側の島(この世)とむこう側の島(あの世)の連続性が一時的に分断されてしまふ。その結果、不死であつた人間が、死すべき存在となつてしまふ(両親の死)。

むこう側へ行くことが不可能となつてしまつた人間は、それまで持ち合せていた霊的力も失う。バリガンシンがたつたの一度だけボンと臼を突くと、簡単に脱殻できた(26、68行目)のに、何度突いてもなかなか脱殻できない(202、203行目)普通の人間となつてしまふ。連続していたこちら側の世界とむこう側の世界が、一時的にダナワンが身を隠すことによつて不連続なものとなり、人間に死が訪れ、それまで持ち合せていたむこう側の世界に属する霊的力を失い、そして中間に存在する海は渡ることのできない領域となつてしまふ。

三、二倍進行する舟

この例歌は何度か聴く機会があつたが、歌い手がむこう側の島からこちら側の島へもどつて来る部分(16~22行目と54~60行目)をときどき歌い忘れることがあつた。15(53)行目から23(61)行目へ飛んでしまふのである。それは一体どうしてなのだろうか。その疑問は、二倍進行する舟の謎についての説明から解決される。あるインフォーマントは、海のかなたには衝立てのような鏡が存在し、海のむこう側にあるように見える島とこちら側の島は、実はひとつなのだと説明した。それによると、海のむこう側に見える島は鏡に映つたこちら側の島の投影であり、むこうの島はこちらの島であり、こちらの島はむこうの島である。

つまり、むこう側の島へ漕ぎ渡つたように見えるのは、実は鏡に映っているこちら側の島にもどつて来ただけのことなのだ、という。だから、一漕ぎしかしていないのに二漕ぎ分進み、四漕ぎで八漕ぎ分進むのだ、とそのインフォーマントは説明した。むこう側の島へ渡り、またこちら側の島へもどつて来なければならぬところを一度で行つてもどつて来るというところから、二倍進行する舟の秘密が解ける。と、同時になぜ歌い手がむこうの島からこちらの島へ帰つてくる部分を歌い忘れるのか、という疑問も解ける。

四、水汲み場

姿を暗ましたダナワンは、捜しにやつて来たシャムブリラワンとクンクヌガンの竹筒から水を飲む。水汲み場(大地の穴から水が湧き出ているところ)は、目に見えない霊的存在がこの世に出現し、この世の人々と接するところである。霊的存在は、このような大地の穴(洞窟、泉、大地の裂け目、窪地、崖崩れをおこしたところなど)からこの世へやつて来る。逆に、特別な能力を持ち合せている人(たとえば儀礼執行者)があつた世へ行つてもどつて来る場合にも、これらの大地の穴などを通して往来する。

五、罨

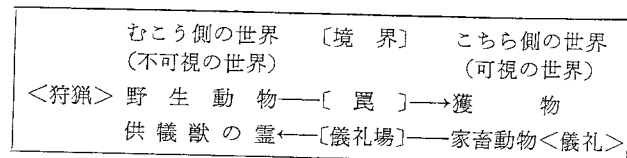
目に見えない存在となつたダナワンを捕えるために、父親は数居に罨を仕掛ける。獲物となる野生動物は、タジャ

ワン族にとって目に見えない存在であり、仕掛けた罠にかかってはじめて、目に見えない野生動物が目に見える獲物となるのだ、という。

タジャワン族の基本的な狩猟方法は仕掛け罠である。ここに、これらの狩猟観や獲物となる野生動物に対する考え方があらわれている。かれらは、目前に現われる野生動物を弓矢などで射って捕獲するのではなく、森のある場所に罠を仕掛けて、目に見えない掛るかどうかわからない野生動物を捕獲するのである。偶然に目の前に姿を現わす野生動物は、吉凶の前兆と考えられ、獲物とは根本的に異なる意味が与えられている。

むこう側の世界に属する不可視の野生動物は、仕掛けた罠を通過してこちら側の世界へ送り込まれ、獲物(可視の存在)となる。このことは、むこう側の世界とこちら側の世界の互酬的相互関係やタジャワン族の諸儀礼に反映する供儀の観念を理解するうえでの基本的事項となる。狩猟活動の場面では、むこう側の世界に属している不可視の野生動物が罠を通過して可視の獲物となって、こちら側の世界へ贈られる。そして、儀礼の場面では、こちら側の世界に属する可視の家畜動物(ニワトリ、ブタ、犬)を儀礼場で屠殺し不可視の供儀獣の霊をむこう側の世界へ贈る(図I参照)。

図I



罠は可視の世界と不可視の世界の接点であり、境界でもある。罠と次に述べる敷居は、密接に関連している。

六、敷居

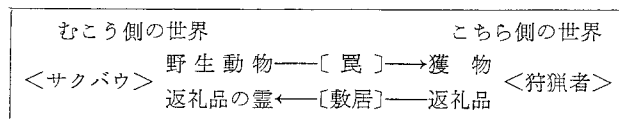
タジャワン文化においても敷居には、重要な意味が付与されている。ここでは、狩猟シーズンにおける罠と敷居の象徴的関連性について考えながら、敷居のもつ意味について述べてみよう。

そのためには、狩猟シーズン開始を告げるバン・グユッド(Pang-guyud)儀礼を簡単に見てみる必要がある。その狩猟開始儀礼は、このようなものである。雨季に入り、連日のように雨が降り続くころに、この狩猟開始儀礼は執行される。家の主人(狩猟者)は、自分の家の戸口から森の方向へ真直ぐにつづく小道のところ(戸口から約5〜10メートルぐらいの距離)に植えてあるグユッド(guyud)とよばれる種類のバナナの茎を、約10cmぐらいの大きさに輪切りにする。その輪切りの部分を、後ろ向きになって家の開いている戸口をめがけて放り投げる。家の中へ投げ込まれたそれは、室

内の床の上にバラバラとちらばる。それから、儀礼執行者はイノシシの真似をして四つん這いで一直線に家の戸口をめざして歩いて来る。イノシシは、そのまま階段を登って室内に入ろうとする。イノシシの前足がまさに敷居をまたいだ瞬間、室内で待ちかまえていた家族のうちの一人が、イノシシの格好をした儀礼執行者の心臓部を手で刺す。儀礼執行者は、床の上で横転して死んだふりをする。この儀礼から、敷居と罠が象徴的に一致していることがわかる。テキストのなかで、身を隠したダナワンを捕まえようとして父親が企てたことは、まさに上述したこの狩猟開始儀礼そのものである。

上述したように、罠は不可視の世界と可視の世界の接点であり、境界であった。それでは、敷居はどうであろうか。イノシシなどの獲物がとれた場合の野生動物の所有者に対する捕獲感謝儀礼から、敷居の意味を考えてみよう。野生動物の所有者はサクバウ(sakbau)とよばれ、山の地下で昼と夜をさかさまにして、タジャワン族の人々とまったく同じ生活をしている。獲物がとれた日の翌朝、日の出前に獲物を捕獲した狩猟者は、獲物に対する返礼品(山刃、斧、ネックレス、衣類などのタジャワン族が本来所有していない、低地民から入手したもの)をサクバウへ贈与するために敷居に並べる。人々は一晩中戸外へ出ず、敷居の内側で過ごし、

図II



サクバウは敷居の外側にたたずみ、日の出とともにこれらの品々を持ち去る。このサクバウに対する感謝儀礼を怠ると、獲物とはなくなってしまう、と考えられている。この儀礼から明らかのように、敷居はサクバウと狩猟者との接点であり、同時に境界でもある(図II参照)。

サクバウから狩猟者への獲物の贈り物は、罠という境界の場で与えられ、狩猟者からサクバウへの返礼品の贈り物は、敷居という境界の場で与えられる。

七、逆転する意味

稲刈りを手伝うためにやって来たおじ達に対するごちそうの量が、バリンガシンとダナワンでは対照的である。バリンガシンは、多量のごはんを箕に山盛りにして差し出す。おじ達はそれを一瞬のうちにペロリと平らげてしまう。一方、ダナワンはたったの二粒の米を差し出す。おじ達はそれを一生懸命食べるが、平らげることができないうちに満腹になってしまう。では、どうしておじ達は、箕に山盛りにされた多量のごはんをペロリと平らげたのに、たったの二粒の米を平らげることが

できなかったのだろうか。ダナワンが呼んで来たおじ達は死者の霊サリンガン(sarigan)である。サリンガンのいるあの世と、この世では意味が逆転する。多量は少量、大は小、速いはおそい、広いは狭い、昼は夜。このように、すべての意味が逆転する。だから、箕に山盛りにした多量のごはんは、おじ達にとっては少量のごはんでしかなく、逆にたったの二粒の米は食べても食べても食べきれないほどの多量のごはんということになり、平らげることができなかった訳だ。

シャムブリラワンがおじ達には、ダナワンの家を教えたのも同様である。すき間の狭い家とは、普通の人間にとっては入り込むことができないが、サリンガンであるおじ達にとっては容易に入り込めるはずである。なぜならば、すき間が狭いということは、おじ達にとっては広いすき間を意味しているのだから。

逆転する意味は、タジャワン族の日常生活のいろいろな場面でも影響を与えている。例えば、森に死体を遺棄してもどって来る時や、たまたま悪霊に跡をつけられた時には、立ち止りながらできるだけゆっくりと歩かなければならない。そうすれば、どんなに速く走ることができる死霊や悪霊でも、けっして追いつくことができない、という。

逆転する意味は、パムッドブルンのなかで頻繁に用いら

れる手法のうちのひとつである。幼なき弱者が実はとんでもない強者だったり、傷だらけのみすばらしい男が本当は大変な美男子だったりする。

八、宇宙観

このテキストのなかには、二つの異なる宇宙観がある。ひとつは、海のむこう側にもうひとつの島(むこう側の世界)がある、という水平的な宇宙観。この宇宙観のなかでイメージされる二つの世界は、テキストのなかで獲物(蜂蜜)がいる海のむこう側の世界と農作物(稲)が実るこちら側の世界として対照的に表現されている。もうひとつは、天上と地下にそれぞれ五つの層(あの世)があるという垂直的な宇宙観。この宇宙観では、ダナワン夫婦が去って行ったあの世とバリンガシン夫婦があとに残されたこの世がやはり対照的に表現されている。

六、考察とまとめ

パムッドブルンを研究する楽しさは、まず歌のもつストリーのおもしろさに接することができる、ということである。また、タジャワン文化を理解するうえで重要と思われる上述したようないくつかのポイントをさりげなく表現し、重要なメッセージをメタフォリカルに聴く者に伝えるとこ

ろにある。

では、このテキストはどのようなメッセージを伝えようとしているのだろうか。上述したように、パムッドブルンはタジャワン族の狩猟シーズンにのみ歌われる狩猟詩歌である。タジャワン族にとって、狩猟行為は狩猟者とサクバウの交換行為である。獲物の所有者であるサクバウから狩猟者へ獲物が贈与されるのに対して、狩猟者はサクバウへ感謝の返礼品を贈与する。つまり、タジャワン族の狩猟活動はサクバウと狩猟者の贈与交換行為であり、その行為が狩猟シーズンを通して連続する。このテキストのなかでもいくつかの交換行為が読みとれる。

たとえば、完成した家を見に来た義父に対して、ダナワンは贈り物をしている。これは、ダナワンによる姻族(妻の親族)に対する贈与行為である。それに対して、シャムブリラワンは稲の収穫の手伝いに来たダナワンのおじ達に對して、自分たちの家(米倉)は、「すき間の狭い家ですよ」と教えて、その内に入って米を持って行ってください、と言って米を贈与している。これは、シャムブリラワンによる姻族(夫の親族)に対する贈与行為である。ダナワン夫婦は、お互いの姻族に対して贈り物をするることによって、両者の贈与交換行為を間接的に成立させている。

ところで、交換の不成立はいかなる事態を招くのだろうか

か。一時的にダナワンが身を隠したこととその結果生じた両親の死は、ダナワン夫婦とバリンガシン夫婦の対照的なごはんの量の差に起因していると考えられる。タジャワン社会において最も重要視される、兄弟(あるいは義兄妹、義姉弟)間の互酬的交換が成立しないこと(つまりバリンガシン夫婦によるタジャワン文化の約束ごと不履行)によって両親の死は引き起された、と理解することができる。

両親の死後も、ダナワンはバリンガシンに対して色々な知識や技術を伝授(贈与)する。たとえば、大家屋の建て方、稲の刈り方、そして米の搗き方など。さらに、ダナワン夫婦のあいだで上述した姻族に対する贈与行為の見本も示す。その結果、バリンガシンはダナワンと同等の知識や技術を得る。しかし、それでも最後までバリンガシン夫婦は自分達だけ大金でごはんを炊いてたらふく食べ続けた。そのことによって、ダナワン夫婦はこの世と決別し、そしてこの世とあの世の決定的な分断という結果を招いてしまった。

死の発生と霊的世界の分離が互酬性の否定、あるいは不平等(ダナワン夫婦とバリンガシン夫婦のごはんの量の差)に起因しているというのが、このテキストの聴き手に伝えるメッセージであろう。このテキストの歌い手やインフォーマントに、テキストの「意味」を尋ねても的確な説明は

パムッドブルンを読む（小幡）

返ってこない。また、このテキストに限らず、どのパムッドブルンに対する聴き手の反応もまちまちである。しかし、このテキストを聴き終えた者の多くは、この世にボツンととり残されたバリンガシン夫婦を感じた、樹皮布を頭からかぶって寝てしまうほどの恐怖感を共有するだろう。そして、なかには滞りなくサクバウに対する捕獲感謝儀礼を行なおうとする者がいるかもしれないし、弟や妹とサツマイモを半分わけしようとする幼子がいるかもしれない。それも、パムッドブルンのもつ社会的効果のうちのひとつなのである。

補記

本稿は筆者が一九八九年二月に後期課程研究報告書として、提出したものを一部修正し加筆したものである。本稿執筆にあたっては、青柳真智子教授から貴重な御助言と御教示をいただいた。

（立教大学地理学専攻博士課程後期課程）